

## 優秀賞

### ありのままの姿で

徳島県 城ノ内中等教育学校 一年  
槇山 友望

私の心のワクチン。それは、自分がありのままの姿で生きていると感じること。そしてこのワクチンが、どんなにありがたいことかを考えさせてくれるのも、心のワクチンである。

私は1才ぐらいのときに、アレルギーを発症した。小麦、乳製品、卵を食べることのできない生活が始まった。私は、保育園の年中の頃までは、まわりの目を気にせずにアレルギーと向き合った。しかし、年長のときにお好み焼きを作る行事があり、自分だけ材料が違うことで、友達に鋭い目で見られていないか、という不安がとても大きくなった。

そして、小学校に入学。週に一回がパンの日なので、代用するためのごはんを持っていった。(なんで私だけ)という複雑な気持ち乗り越え、小学校に入学して4年が経ち、私の前には転校という壁が立ちだかった。もちろん、私のことを知らない人たちばかりになるため、アレルギーとも一から向き合わなくてはならない。

(アレルギーがあるだけで、みんなに注目されるのはいや)

そんな思いを胸に抱えながら、転校を決意した。

転校して、その気持ちはやはり膨らむ一方だった。私は、注目されるのがいやだったので、学校にパンの代用として持っていった弁当をかくして食べるようになっていた。

そんな不安の中、私は変わった。世界には私以上に自由を奪われている子どもたちがいること、関係のない戦争に巻き込まれる子どもたちがいることを、ニュースから教わったからだ。

(グズグズしていることが、どんなにかっこ悪いことか。そんな私は、誰にも何にも貢献できない人間なんだ)ということを経験して考える毎日だった。

6年生の3学期、家庭科パーティーで「サンドイッチを作ろう」というテーマが出た。けれど私は、サンドイッチを食べられない。その代わり、おにぎりを食べた。でも、それは私だけではなく、班員全員で食べた。そのとき、みんなが私に手を差し伸べてくれていると感じた。

アレルギーによって、食べられないものがあるけれど、食べられないものがあると考えず、自分の「個性」ではないか、そう思うことが増えた6年生の3学期。自分のありのままの姿を見つけることができたその日。

それから約2カ月経った4月。新たな一歩として、中学校へとコマを進めた。最初は戸惑った中学校生活。しかし、アレルギーのことを友達に話すことで、こんな自分を受け入れてくれた友達の優しさに気づいた。これは、アレルギーのおかげだったのかもしれない。

縛られていると考えるのではなく、自分のありのまま生きていけることが、「私のワクチン」であるとともに、自分と他人を結びつけてくれる「糸」であるのかもしれない。